

---

# Cross Hearts

天城 枢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Cross Hearts

### 【Nコード】

N2253BA

### 【作者名】

天城 枢

### 【あらすじ】

なんの変哲もない人生を送るそれがすべてだと思っていた、彼女に出会うまでは……。彼女は俺の知らない世界を知っていた、否、俺だけが知らなかった。俺の友人達は知っていた、そして俺を巻き込まないように知らないフリをしていた。

夜の世界それは異能者達の殺し合い最後の独りになるまで、還る条件は単純だった自分以外の一人を殺すただそれだけ……

## プロローグ

ハアハアと息を荒らし、ボロボロの体を引きずりながら、一人の少女が歩いていった。綺麗な顔は擦り傷で、スタイルの良い体から血を流している。もちろん服は所々が破れている。

空は曇って月は見えない否晴れていても見えないだろう今日は新月なのだから・・・

「眠気がハンパツない」

「オッス、夜斗。相変わらず眠そうだな、そういや昨日の新月はすごかったなあ！」

「無理やり話題を作ったな・・・悪いが見てないんだ。すまん、純」

ホームルーム前の他愛もないただの会話していた俺と純は、黒板側のドアにクラスメイトが集まっていたり注目していたりすることに気付いた。

「今日は姫様、来ないと思っていたぜ」

「俺もそう思った」

いつも早く来る、姫様こと更級 瑞姫が今回遅れたことにクラスメイトが驚いたり心配して駆け寄ったのだろう・・・女子達は、だが。男子達は単純だ。その美しい容姿に見とれているだけだ。

「あれだけ可愛くて性格も良い、付き合いたいよなあ？」

「あーそだな」

「適当な返事だな」

「可愛いのは認めるが性格は猫被ってるかもしれないからなんとも  
言えない」

そんなことを話していると一つの足音が俺の横で止まり・・・

「クールですね、相変わらず。ほんと惚れちゃいます。・・・おは  
ようございます、夜斗君」

周りには聞こえないボリューム、もちろん純には聞こえているが・  
・

「夜斗、殴って良いよな?!」

「純君もおはようございます」

「あ、お、おはようございます。更級さん」

ある意味、助かった・・・

キーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴ったそれを合図に俺達  
は自分の席に座った。

ファーストキスは鉄の味!?

授業もすべて終わり放課後となった。

「そっぴゃさ、瑞姫はなんで今日遅かったんだ？」

「知りたい？」

「それなりにな」

「俺も気になる」

純が会話に参加してきた。姫様の事だからそりゃあ気になるか。

「なら〜私と付き合ってくれたら教えて・・・」

瑞姫は一呼吸置いて色っぽくしながら

「あ・げ・る」

「なら、いい」

「・・・夜斗よ、殺してもいいよな?!」

「瑞姫!教えてくれ。お礼は、いつか必ず、・・・精神的に返す」

周りの男子達の視線が恐いから聞いた・・・はず。

「ふふ、単に交通の混雑です」

「車で登校してたな。流石、姫」

嫌みたっぷりに言ってみた。

「なら、迎えに行つてあげようか？」

ニヤニヤしてやがる。

「さて、帰るか」

「夜斗。おめえ、話逸らしたな」

「私、生徒会の仕事あるから無理です」

「純は？」

「俺は部活だわ」

「なんだかんだでいつも一緒に帰ってくれるよね」

「女子を一人で帰らすのは危ないからな」

「ほんとっ、惚れちゃう」

「あー転校生は言う事が違うなあ」

純が嫌みげに言いやがった

「ま、ここらで帰るわ」

「はい、お疲れ様です」

「チツ、スルーか。・・・お疲れ」

学校を出て家に続く山道を歩いていると倒れている人を発見した。顔は汚れて服は所々が破れて近づいて見ると、服装は同じ学校の制服だと分かった。

「おいおい、なんでこんな状態なんだ・・・。はあ、ここでほつとくのは男子としておかしい、か。さっきあんなこと言っつんじゃないかな」

理由はこいつが起きてからだな。

家に着いたはいいがどうするか。手当ては服を脱がさないといけない、そこで目が覚められたら・・・最悪だな。おぶってるの

も疲れるし一度ベッドに寝かすか。

「俺のベッドだが起きた後に臭いとか言うなよ、粥作ってくるかなら待つてるよ。寝てる奴言っても無駄か……」

冷蔵庫に朝の残りのご飯があつたな。鍋にそれと水・卵入れて、と。……おし、できた。

「入るぞ」

俺の部屋に入るのに一言要るのか……

ドアを開けると少女が顔を上げてこちらを見ていた。

「大丈夫か？」

「ええ。それとあなたは？」

「夜斗。あんたは？」

「リナ」

「リナ、どうして倒れてたんだ？」

「……」

「言えない、か。それならそれで良い。困ったことがあれば手伝える範囲で手伝う。まずはこれでも食つとけ」

「……ありがとう、あなた優しいのね」

「タオルと変え着持つてくるから待つてる」

やべえ。可愛いとか越してるぞ、あれ。

「タオルと変え着持つて行くか……」

洗面所に置いてあるタオルと変え着を持つて自室に居るリナに渡

し部屋の外で待つと言ってでようとしたときに「お粥、おいしかった」と微笑んだ。

「入っていいよ」

美しかった、ただ美しかった。髪は赤色のような感じで肌は白くスタイルは細過ぎず決して太ってもいない。

「入ってそうそうに見続けるって失礼よ」

「ああ、すまない」

「さつき手伝ってくれてるって言ったよね」

「ああ」

「ならお願い、ベッドに寝て、私と」

「はあ!？」

有無を言わず俺の手を握りベッドに倒した。状態は俺が下で上にリナが乗る形になっている。・・・そこからいきなりキスをしてきた。味は甘くなく血の味がただただだった・・・そこからの記憶は無い、俺が気絶したからだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2253ba/>

---

Cross Hearts

2012年1月6日15時47分発行